

生涯にわたって  
社会のいたるところで学ぶための方法序説

# 生涯学習のDXとLX

松田 道雄

提案：自身の職場や担当事業でのデジタル活用と学習者のより充実した学習体験のあり方を探る試行実験をしていきたいと思います。

皆さんの職場や事業では、デジタル活用や、学習者体験の目線からの取り組み状況はいかがでしょう？

ビジネスの世界では、DXとUXということがよく言われています。DXとは、デジタルトランスフォーメーションの略です。意味は、「進化したデジタル技術を浸透させることで人々の生活をさらによいものへ変革させること」といった意味です（2004年スウェーデンのエリック・ストルターマン教授によって提唱された概念）。一方、UXは、IT関係でよく用いられますが、ユーザーエクスペリエンスの略です。意味は、「ユーザーが、製品やシステムやサービスを通じて得られる体験」

といった意味です。人々の学習体験の仕事に関わる私たちにとっては、ユーザー（利用者）をラーナー（学習者）と置き換えて、UXをLX（ラーナーエクスペリエンス）と呼ぶことにしましょう。

例えば、筆者が本連載でも紹介してきた、コロナ禍の中で、家で孤独化するシニア世代（長野県シニア大学生）が、遠隔会話のアプリ（Zoom）の使い方や学び教え合い、シニア同士のみならず、遠くの若い世代（私のゼミ生）などとも会話交流して、それまで体験できなかった新たな体験を楽しんだことなども、「進化したデジタル技術を浸透させることで人々の生活をさらによいものへ変革させること」の事例の一つになったのではないかと思います（「等話」新評論、2021年）。

遠隔会話のアプリの使い方を学んだ長野県のシニアの方々は、その後平時に、自分たちでも主体的にそれを用いて会話交流を

行い、新たなコミュニティづくりを図るようになったと聞いています。コロナ・高齢者・家・孤独化といったイメージが払拭され、身近なスマホとアプリを活用して、家にいながらもいろいろな人とながら、日常も人々とともに生きる生き方を心がけ、地域生活の質を向上させていくことができているように思います。

ここで重要な視点は、学習者であるシニアの方々がどのような体験ができて、それが当事者の生活の質をどう高める一助になっているかというLXの視点です。そして、それを実現するには、シニア担当のコーディネーター（つまり、シニアの方々の生涯学習支援者）のこまやかなシニア個人々人へのサポートや支援活動がありました。

社会教育主事・社会教育士資格課程で、「生涯学習支援論」という新たな科目が開講されましたが、その最も重要な学びは、実際に、人々の生涯学習を支援

している現場の方々の実践知と支援スキルの基本を学ぶということがあるでしょう（机上の空論ではなく）。

こうしてみると、DXとLXは一体であり、少しずつでもその実践を試み、しくみづくりをはかっていくことが、現代社会において、学習者を支援する社会教育の担当者・職員の役割なのではないでしょうか。

ビジネスの現場では、「お客様目線」「消費者主権」ということばもよく言われます。教育でも、学習者がどのように学び変容したのが最終目標になっていますが、どこまで学習者の立場に立てるか、心がけと継続的な改善が必要です。

例えば、よくある講座の形式に、ある学習テーマの講座に、それを専門的に教えてくれる講師を招聘し、受講者を募集し、当日は講師がパソコンスライドで説明し、受講者はだまって聞いて、最後に、アンケート用紙に記入して帰る、という光景が

ありますが、この時、授業担当者ほどれくらい学習者の目線に立っているでしょうか？

このような講座は、伝統的な「上からの伝達型の教授法」の形式で、学習者の体験からすれば、「黙って話を聞く」という貧しい体験だけになっています。しかも、聞いた情報や知識は、数日たてばほとんど忘れられます。

また、そのような教授法は、進化しているデジタル社会の今、YouTubeで配信してくれば、自宅で誰でもコロナ感染を気にせず、ゆっくりお茶を飲みながら視聴することができ、かつ、何度でも反復することができま

す。実際、コロナ禍の中、多くの大学で先生方がそのような方法で授業をしました。YouTubeの活用ということから言えば、その学習テーマのキーワードを入れると、たくさんの方が投稿している番組内容を無料で見ることができます。Zoomの使い方を知りたいと思

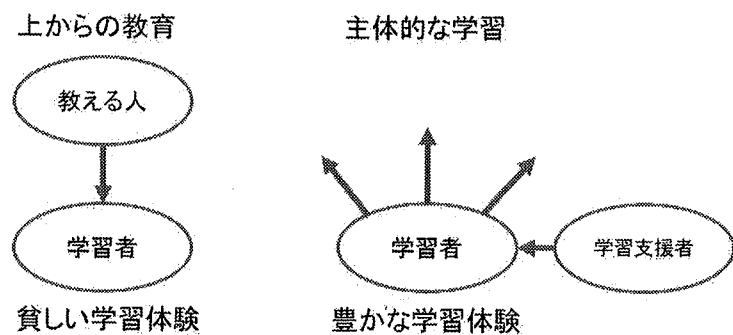
つたら、YouTubeでいくらでも学ぶことができます。以前からすれば、自宅で独学できるチャンスは格段に増えています。

わざわざ、学習施設に足を運んで話を聞いて、その後忘れてしまうといったこれまでの講座は、いかに無駄が多かったのかと思ってしまう。

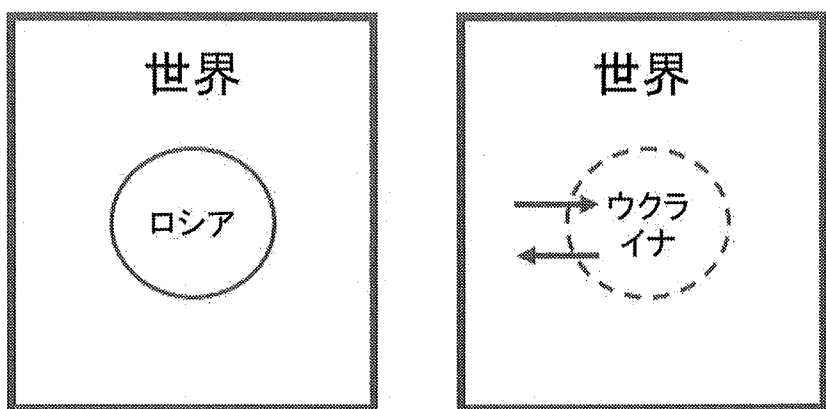
直接生身の人間が移動して集まって、学ぶ内容は紙を見ながら、先生や講師の話や聞くと聞いてこれまでの教育方法・学習方法は、そこに集まり、先生や講師が知識を提供しないと学ぶことができないという意味で、閉ざされた学びでした。そのような閉ざされた空間では、そこで知識を教え授ける先生が強い立場に立ちます。その先生の話が、実際の社会や現場にどうつながるのか、教室の外の他の人たちの考えと共通するのかわ

らうのかもわかりません。これが、一方的に先生が

図1 貧しい学習体験と豊かな学習体験



## 図2 閉じた世界と開かれた世界



にさらに豊かな学習体験（LX）  
 ができるよう、デジタル活用が  
 進められています（DX）が、  
 では、読者皆様の社会教育の現  
 場はいかがでしょうか？（もち  
 ろん、画面ばかり  
 見続けることの弊  
 害もありますの  
 で、スクリーンフ  
 リーの体験もます  
 ます重要になって  
 きますし、直接対  
 面の場合はますま  
 す知識以上に相互  
 の人間的な交流が  
 求められます。）  
 新型コロナウイルス  
 ルスのワクチン接  
 種予約などでも、  
 社会インフラとし  
 てLINEを活用  
 することが普通に  
 なり、若者だけ  
 なく、シニア世代  
 も習い事教室のお  
 知らせなどをLI  
 NEで確認やりと

りしています。  
 今や、社会教育を学ぶ人は、  
 ほとんどスマホを持っているこ  
 とでしょう。とすれば、これま  
 での伝統的な学び方の固定観念  
 に縛られずに、公民館などの教  
 室と自宅を結び、どこからでも、  
 誰とでも、さまざまな学びを深  
 め合え、思わぬ可能性を拓いて  
 いく人生体験を提供することこ  
 そが、生涯学習・社会教育の醍  
 醐味なのではないでしょうか？  
 そのような試みの一つとして、  
 本連載も、本誌『社会教育』H  
 Pに無料掲載していただくこと  
 になりました。読者皆様も、さ  
 つそくお手持ちのスマホで、「社  
 会教育 日本青年館」で検索な  
 されて、雑誌HPをご覧ください。  
 そこからこの連載を見ることが  
 できます（雑誌のレイアウトで  
 すが）。  
 また、筆者のほうでは、今年  
 度の大学の生涯学習の授業も、  
 全国の生涯学習の現場の方々と  
 相互交流できるように、私の資  
 料は、noteブログに掲載して、

受講学生だけでなく、皆さんに  
 も開いたものにし、若者世代  
 （大学生）の生涯学習に対する思  
 いなどもアンケート集計グラフ  
 にし、それ自体を当事者である  
 大学生が考える教材として、同  
 時に生涯学習事業担当者が参考  
 になる資料として公開したいと  
 思います。のちほど、その実験  
 経過も紹介します。  
 この原稿はスマホでは見ずら  
 いので、試しに、筆者のnoteブ  
 ログにも掲載してみます。「松田  
 道雄 note 生涯学習のDXとL  
 X」で検索してみてください。  
 読者皆さんのDXとLXの試み、  
 創意工夫などもお知らせいただ  
 ければ幸いです。  
 （まつだ・みちお 生涯学習のD  
 XとLX、ともに試みを広げて  
 いきませんか！）  
 尚綱（しょうけい）学院大学教授  
 ・宮城県名取市  
 連絡先：  
 (m\_matsuda@shokei.ac.jp)

かつて、ヨーロッパで起こつ  
 たキリスト教の宗教改革とは、  
 それまで教会という閉じた空間  
 の中でキリストの教えを説いた  
 聖職者が絶対的に強い立場であ  
 ったのに対して、印刷機の発明  
 によって、キリストの教えを記  
 した聖書が普及し、聖職者に頼  
 らずに聖書を中心にした新たな  
 キリスト教の広がりが生まれた  
 と、世界史の授業で学びました。  
 今、インターネットの普及と進  
 化は、印刷革命以上の情報革命  
 と言われています。  
 読者皆さんが今読んでくださ  
 っている本誌も紙でできており、  
 本誌を購入された方々が読んで  
 くださっています。  
 しかし、一方で、インターネ  
 ットで調べたいことばを検索す  
 ると、私たちは無料で山ほど公  
 開されている情報を知ることが  
 できます。文部科学省のHPを  
 見れば、法律から毎年の白書、  
 さまざまな政策などを調べるこ  
 とができます。  
 また、国や企業だけでなく、

たくさん個人も情報を発信し  
 ています。もちろん、すべてが  
 公開されているわけではなく、  
 無料で見ることは一部で、その  
 先を読みなければ、有料とい  
 うのはたくさんあります。新聞や  
 本などもそうです。  
 教室の中で、受講生がスマホ  
 を持っていれば、教壇の先生の  
 話を聞かずに、スマホで教室外  
 の友だちとSNSをしていたり、  
 ゲームをすることもできます。  
 しかし、積極的な利用として、  
 スマホで授業の内容に関わるこ  
 とを、自分で検索して調べるこ  
 ともできます。小学校や中学校  
 で、児童生徒一人に一台タブレ  
 ットを持たせようというのは、  
 児童生徒が主体的に自らインタ  
 ーネット上の情報を探したり、  
 情報を共有したり、発信すると  
 いうことができるからです。  
 それ以前は（今でも多くはそ  
 うですが）、学習者が学ぶ内容は、  
 教える先生が作成し、それを先  
 生が黒板に書いたり、パソコン  
 からのスライドで投影し、紙に

印刷して、学習者はそれを受け  
 身で受け取り学んでいました。  
 印刷の発明以降、これまでも  
 図書館に行けば、書物を読んで  
 独学で学ぶという学び方のスタ  
 イルもあります。しかし、現在  
 のインターネットは、単に書物  
 の代替え一部だけでなく、情報  
 の編集や共有、先の事例の遠隔  
 会話なども含めて、リアルな学  
 び合いの代替え以上の活動や相  
 互補完的要素がどんどん増えて  
 います。まさにそれがDXとい  
 うことなのでしょう。このよう  
 な少しずつの変化は、私たちが  
 仕事でも普段の生活でも体験し  
 ていることです。30年前を思い  
 出して比べてみれば、雲泥の違  
 いがあることがわかります。こ  
 れからさらに進化発展していく  
 ことでしょう。  
 学習者が主体的・能動的にに  
 学ぶアクティブラーニングが提  
 唱されていますが、それには、  
 一人一人が持っているパソコン  
 やタブレットやスマホなどのイ  
 ンターネット接続機器が大きな

役割を果たします。  
 この原稿を書いている間（3  
 月末）、世界では、ロシアが一方  
 的にウクライナに軍事進攻をし、  
 ウクライナの人々の命と暮らし  
 が破壊され続けています。その  
 映像を見て、道徳的な心情を持  
 つ人であれば、世界中の誰もが  
 即座にその悲劇をやめさせたい  
 と思うはずです。しかし、ロシ  
 アの国営放送はその事実を国民  
 に放映せず偽りの情報を伝え、  
 また、インターネットでも見れ  
 ないようにしています。  
 一方、インターネットを制限  
 していない国であれば、ウクラ  
 イナのゼレンスキー大統領や若  
 いIT担当大臣のSNSや、現  
 地の市民が投稿する映像や声を、  
 私たち日本人も知ることができ  
 ます（自動翻訳があるので）。そ  
 れによって、世界中の政治家・  
 企業・団体・個人がウクライナ  
 を支援しています。侵略や戦争  
 がどれほど残酷なものか、これ  
 までは間接的にしかわからなかつた  
 ことが、今、誰もが手にし